黒い犬

田中浩司

いつもの角を曲がるたび
古い一軒家の庭で
黒い中型の犬が私を見ている
軽く尾を振っている
私は小さく声をかけて通りすぎる
今日は　犬のそばへよって行った
犬は私の顔を一心不乱に舐める
犬は私の体に全身を預ける
私は涙がこみあげてくるのをおさえる
「いじわる。いじわる」
心の中で皆のことを叫んだ
犬は静かになった
私の横にぴたりとついている

意味

田中浩司

青空の中へもぐっていく人がいる
ぼくは彼の足をつかまえた
そして彼に一言　言ってやった
「お前、それでも人間か」
彼は答えた
「お前こそ何様のつもりだ」
ぼくは彼の足をはなした
彼はするすると空の中へ
入っていってしまった
ぼくは一人　部屋に取り残されている
ぼくはすべての人の人生にとって
必要ではないということなのか
と　ふと思う
いったい彼はなんだったのか
あれはなんだったのか
いったいぼくの人生にとって
どんな意味があったのか